

現場から学ぶ茨城学 ～「食」で開こう地域のトビラ～

課外活動

地域交流

代表者：教育学部 学校教育教員養成課程 1年 渋谷 直樹

連携先

- ・あしたの学校
- ・JA水戸

顧問教員

清水 恵美子

(茨城大学社会連携センター 准教授)

参加者

- ・渋谷 直樹 (教育学部 学校教育教員養成課程 数学選修1年)
- ・佐藤 響 (教育学部 学校教育教員養成課程 英語選修1年)
- ・佐藤 豊大 (人文学部 社会学科1年)
- ・赤池 夏実 (人文学部 人文コミュニケーション学科1年)
- ・飯山 真帆 (人文学部 人文コミュニケーション学科1年)
- ・川原田晴可 (人文学部 人文コミュニケーション学科1年)
- ・宮田 明歩 (人文学部 人文コミュニケーション学科1年)
- ・佐藤 詩音 (人文学部 人文コミュニケーション学科2年)
- ・蓮田りりか (教育学部 情報文化課程 社会文化コース1年)
- ・平川 莉帆 (教育学部 学校教育教員養成課程 美術選修1年)
- ・大森 彩加 (教育学部 学校教育教員養成課程 美術選修1年)

- ・香取和可奈 (教育学部 学校教育教員養成課程 美術選修1年)
- ・田邊 悠果 (教育学部 学校教育教員養成課程 美術選修1年)
- ・竹田 優美 (教育学部 学校教育教員養成課程 美術選修1年)
- ・佐藤 梓 (教育学部 学校教育教員養成課程 美術選修1年)
- ・大和田真優 (教育学部 学校教育教員養成課程 美術選修1年)
- ・松崎 由衣 (農学部 地球環境科学科1年)

プロジェクトの概要

●プロジェクトの背景

茨城大学では平成27年度より、県内の風土や特色、課題を学ぶ地域志向系科目「茨城学」が開講された。それに伴い、茨城に関心のある学生の交流の場、かつ企画立案のプラットフォームとして、「イバラキカク」(毎週水曜13:00~14:30 @茨城大学図書館本館1階インフォメーションラウンジ)が誕生した。その場集った学生らによって、「農業県 茨城」という事実が周知されていない、地域の方々と会話する機会が少ない、などといった意見が交わされた。「食」を切り口とした地域に開けた活動の必然性を痛感し、茨城学を受講する1年生が主体となり、食プロ(本プロジェクトの略称)が始動した。

●プロジェクトの目的と内容

主な活動は、茨城県内で収穫される旬の食材を扱ったフェスの開催である。埋没している県産食材の魅力を認識してもらうと同時に、「食」をコミュニケーションツールとして活用し、学生と地域住民がつながり、学生がより積極的に地域活動に参加していくことを最終目的とする。

フェスは夏カレー、栗、常陸秋そば、白菜、干し芋をテーマに、全5回開催する。具体的な内容として、学生独自でレシピを発案し、調理や会食をしながら参加者同士で交流を深める。加えて、農家さんをはじめ、茨城でお仕事されている方々を講師にお招きしてトークライブを実施する。また、学生が進出できる地域活動を紙媒体で発行・配布し、ミニワークショップも行なう。

●プロジェクトの活動報告

- ①夏カレーフェス 2015年7月25日(土)
@堀原市民センター 動員36名



夏カレーフェス 集合写真

トークライブ

- ・佐川 雄太 さん
(雇用人材協会 あしたの学校 より)
- ・海野 誠司 さん
(ねぎ・ゴボウ・梅農家 代表)
- ・関 沙雪 さん
(キャトルファーム・セキ 肉牛農家)

交流会

連携先であるJA水戸様より、トマト、ピーマン、茄子、キャベツ、オクラ、かぼちゃの6種類の夏野菜をご提供いただいた。野菜別に参加者をグルーピングし、夏カレーの調理・会食を行なった。グループの垣根を越えて、カレーの味を食べ比べながら全体で交流した。



夏カレーの調理風景

- ②栗フェス(石岡市産) 2015年11月1日(日)
@渡里市民センター 動員33名



栗フェス 集合写真

トークライブ

- ・菊地 章雄 さん
(青春畑 きくち農園 代表取締役)
- ・坂本 裕二 さん
(有)時の広告社 企画推進部 より)
- ・飯山万寿夫 さん
(飯山製茶工場 より)

交流会

- * 栗スイーツ・栗ごはんの会食
(栗のご提供：青春畑 きくち農園 様)
- * おいしいさしま茶の入れ方講座
- * 「地域活動情報誌」の配布開始



食プロ presents 栗スイーツ



- ③常陸秋そばフェス 2015年11月23日(月・祝)
@渡里市民センター 動員34名



常陸秋そばフェス 集合写真

トークライブ

- ・眞家 一 さん
(手打そば にのまえ 店主)
- ・井坂 勇方 さん
(いばらきキャンドルナイト キャンドルアーティスト)
- ・庄田 充貴 さん
(起業家育成プロジェクト 代表)

交流会

- * 常陸秋そばの会食
(けんちん汁・トマトベース2種類)
- * 「地域活動すごろく」によるワークショップ



食プロ presents 常陸秋そば



地域活動すごろく

- ④白菜フェス(結城郡八千代町産)
2015年12月27日(日)
@渡里市民センター 動員42名



白菜フェス 集合写真



食プロ presents 白菜鍋

オープニングアクト

茨城大学 よさこいサークル海砂輝ーみさきー

トークライブ

- ・生井 友葵 さん
(八千代町役場 産業振興課 主事)
- ・埜 佳憲 さん
(株式会社飛脚堂 代表取締役)
- ・齋藤 信之 さん
(車椅子バスケット スピニング・フープス・レボリューション 代表)

交流会

- * 白菜鍋の会食
(白菜のご提供：結城郡八千代町)
- * 地域活動の紹介 兼「人探しゲーム」
- * 八千代町イメージキャラクター「八菜丸くん」登場



人探しゲームで全体交流

⑤干し芋フェス(ひたちなか市産)
2016年1月30日(土)
@堀公民館 動員58名(最大人数)



よさこいサークルによる演舞



干し芋フェス 集合写真

オープニングアクト

ひたちなか市出身シンガーソングライター
lisa*

トークライブ

- ・八木岡 努 さん
(JA水戸 代表理事組合長)
- ・安 富生 さん
(干し芋農家 ひたちなか市認定農業者の
会 会長)
- ・鬼澤 希 さん
(カタリバいばらき準備室 代表)

交流会

- * 干し芋スイーツ (パウンドケーキ・クッキー・チョコ干し芋) の会食
(干し芋のご提供: 勝田営農センター様)
- * 干し芋味納豆ワッフルの試食
(協賛: 株式会社金砂郷食品 永田社長)
- * 「地域活動心理テスト」によるワークショップ
- * 食プロ presents レシピの配布

茨城大学広報誌iUP 2015 (干し芋フェス)



lisaさんによるオープニングライブ



食プロ presents 干し芋スイーツ

●広報・メディア・取材掲載



美術選修作成のイベントポスター



Usream配信による広報活動



FMIぱるるん おたふくラジオ 出演



茨城新聞 2015年7月29日(水)付 1面
「担い手育成着々」(夏カレーフェス)

プロジェクトの成果報告

●プロジェクトの成果

私達は各フェスの開始時と終了時にアンケートを実施し、長期的にフェス参加者の意識変化を調査した。

■ 茨城で有名だと考える食材は、終始突出して「納豆」が優勢であった。一方で私達が取り上げなかったメロンやレンコン、あんこうなどの認知度も高かった。また、芋やキャベツといった日常的な野菜を県産品として購入する人が増加した。ゆえに産地への関心は、ブランド化された農産物に留まらず、身近な野菜や魚にまで及んでいることが判明した。

■ 「食」と同時に地域活動への参加意欲が高まり、学生の地域に対する受身的な姿勢から脱し始める傾向が見られた。以下、フェスに参加した学生が取り組んだ地域活動である。

- ・あしたの学校6期生入学
- ・NPOカタリバカタリ場企画
- ・つちっこ河和田メロンフェアお手伝い
- ・千波湖定例ゴミ拾い活動
- ・渡里湧水群清掃活動
- ・保和苑納涼祭学生スタッフ
- ・常総市水害復旧・被災地復興支援
- ・教育支援ボランティア
- ・地域振興系イベント実行委員 他多数

当初「地域貢献したいが、行動していない」という学生が多数存在していたが、継続的な情報発信とワークショップの実施により、自身の活動レベルを認識し、地域との関わりの薄さに危機感を抱き始めるようになった。フェスを重ねるごとに回答が具体化され、自身の活動スタイルや範囲、地域での可能性を理解した上で、アクティブに行動する学生が続出した。また、多様な団体や個人と幅広いネットワークを開拓し、仲間同士で主体的に企画する学生が多く見られた（阿見を拠点に

活動か?）。

■ 白菜フェスでオープニングアクトを飾ったよさこいサークル海砂輝が、フェスに参加していた東北復興ボランティアサークルの学生と連携し、後日福島県楡葉町で演舞を果たし、イベントを成功させた例も出ている。

学部や学年を横断するだけでなく、他大学生、高校生、社会人、高齢者といった幅広い年齢層、様々な職種の方々の価値観に触れ、非日常を体感できる深みと広がりのあるフェスを展開することができた。学生との交流で社会人の意識も向上したという成果も聞かれ、総じて参加者を能動的に活動させる企画モデルを創出できたのではないかと振り返る。

●外部からの評価

連携先 佐川 雄太 様より

2015年5月27日(水)15時、メンバーの佐藤君からプロジェクトの相談の電話をいただき、後日会うことに。赤池さん、渋谷君とともに職場まで来ていただき、プロジェクトの話を聞いた時は正直「大丈夫か?」と心配もありましたが、今ではそれを反省しています。

メンバー一人ひとりが自分の得意分野を活かしていたことや、反対に苦手なことでも挑戦したことが成果につながったのではないかと感じています。また、回を重ねるごとにプロジェクトの渦が広がり、学生だけでなく多くの社会人を巻き込んでいくプロセスには大人が学ばされました。

あの、初めて電話をかけてきた時の説明のまとまりのなさ、初めて事務所に来た時のたどたどしさと汗だくの彼らの姿は一体どこへ。プロジェクトが終わる頃には、すっかり見違えたみんなの姿と、企画に参加する驚くほど多くの学生たち。メンバーの成長だけでなく、多くの学生の心や行動に変化を与えた、とても価値のある取り組みであったことは間違い

ありません。

今後も挑戦を続けることや、地域と学生をつなげること、学生のはじめの一步の機会をつくっていくことを期待しています。

●今後の展望

本プロジェクトは「茨城学」から派生したものであり、入学したての1年生が中心となり企画運営に携わってきた。プロジェクトメンバーには県内生だけでなく、北は北海道、南は鹿児島まで県外生が半数存在している。生まれ育った環境や年齢が異なれば、各々のアイデアや視点も多種多様で、物事の得意不得意も分かれる。特に茨城をよく知る県内生ではなく、茨城と地元を比較できる県外生の意見は新鮮であった。各個人が互いの能力を尊重し生かせる場を私達自身で整備し、役割分担が明確であったことも踏まえて、プロジェクトの高質化、効率化につながったように思える。

「茨城学」は今年度から開講された茨城大学独自の新たな試みであり、私達はいわば「茨城学1期生」にあたる。食プロを1つの前例として、来年度の新入生（茨城学2期生）の新たな発想や活動を期待したい。勿論、私達の活動を次世代に引き継ぎ、等身大の言

葉で語ることにより、「1年次からの地域志向（地域参加）の必要性」、「1年生だからこそできる無限の可能性」、「集合知の力を活用することの重要性」を感じ取ってもらいたい。

食プロはこの1年間、茨城で収穫される有名な食材や産地をテーマに取り上げた。そして次第に沢山の方々の目に留まり、多大なご支援、ご協力をいただけるようになった。このつながりを一過性のもので終わらせず、共同してさらに強固なものへと育てていく考えである。今後は、県内の伝統的な食文化や時代背景、各家庭での食生活を広域に調査し、食材の選択、調理法、スローフード運動の高まりなどといった点から、茨城の「食」を本格的に分析していこうと検討中である。



食プロHP QRコード
ibarakikaku.jimdo.com



この1年間で出逢った地域の皆様